

## 各務支考『つれづれの讃』にみる『徒然草』の新しい読み方

島内裕子<sup>1)</sup>

### 要旨

『つれづれの讃』は、各務支考（一六六五～一七三一）による『徒然草』の全段にわたる評論書である。宝永八年（一七二一）に自ら跋文を記しているので、その頃の刊行であることが知られる。支考は、松尾芭蕉の弟子であり、「蕉門十哲」の一人である。芭蕉の遺文を刊行するほか、支考は独自の視点による俳論書も数多く残している。

支考の『つれづれの讃』は、これまでの文学史研究においては、『徒然草』の注釈書という位置づけをされてきた。ただし、『徒然草』の原文に出てくる人名や地名、難語や歴史上の出来事などを解説する、一般的な注釈書の範疇には入らない。支考は、諷詞・褒貶・あやかし・断絶・虚実・変化など、十三項目の自分自身の批評基準によって、『徒然草』を冒頭部から順に論評した。その際に、江戸時代初期から広く世間に行っていた『徒然草』の章段区分を、大きく四十九の区分に分割し直した。

支考が『つれづれの讃』によって示した、このような『徒然草』の読み方は、儒教や仏教や老荘思想などのどれが、兼好の中心思想であるかを究めようとしてきた、従来の注釈態度を離れて、『徒然草』の文章法の変化に力点を置く新しい読み方であった。

そこから、支考は『徒然草』の文体や表現に、完成度の高い散文小品の可能性を見て取った。『徒然草』と向き合い、思想の変化と展開性を把握する読み方を提示したことが、連句の付け合いの展開性を明確に分類する方法論へと発展したと考えられる。さらに支考は、『本朝文鑑』（一七二八年刊）や『和漢文操』（一七二七年刊）などの俳文撰集を纏めている。『つれづれの讃』は、数々の俳諧理論書の執筆や、複数の俳文集の編纂など、支考自身の文学活動の方向性に、大いに裨益したことを論じた。

### はじめに

『つれづれの讃』は、各務支考（一六六五～一七三一）による『徒然草』の全段にわたる評論書である。宝永八年（一七二一）に、自ら跋文を記している。支考は、「蕉門十哲」の一人で、師である芭蕉の遺文を刊行するほか、独自の視点による俳論書も数多く残した。

支考の『つれづれの讃』は、巨視的に見れば、近世になって次々と出版された

『徒然草』の注釈書の範疇に含まれるが、『徒然草』の原文に出てくる人名や地名、難語や歴史上の出来事などを解説する、一般的な注釈書のスタイルとは大きく異なる。支考は、『徒然草』を冒頭部から順に、自分自身の批評基準によって、内容ごとのまとまりを見出して、大きく区切って論を進めているからである。すなわち、支考の関心は、『徒然草』全体をどのように把握するかという点にある。本稿では、支考によって示された批評態度として、『徒然草』を四十九の大きなまとまりに区分したこと、および、諷詞・褒貶・あやかし・断絶・虚実・変化など、十三の用語を使って論評したことの意義を検証する。これらのことは、『つれづれの讃』の首巻に書かれているので、本稿での考察は首巻の検討が中心となる。

そのうえで、支考が『つれづれの讃』によって示した、新しい『徒然草』の読み方が、支考自身の文学活動、すなわち、数々の俳諧理論書の執筆や、複数の俳文撰集の編纂に大いに裨益したことを論じたい。

支考は、『徒然草』の文体や表現に、完成度の高い散文小品の可能性を見て取った。そこから、『徒然草』と向き合い、思想の変化と展開性を把握する読み方を提示した。そのことが、俳諧ジャンルで、連句の付け合いの展開性を明確に分類する方法論へと発展したのではないかと考えられる。支考によって、『本朝文鑑』（一七二八年）や『和漢文操』（一七二七年）などの俳文撰集が編纂されたのも、支考の文学世界における『徒然草』の存在が、その根底にあったのではない。『徒然草』の役割は、まことに大きいものがあつた。

本稿では、『つれづれの讃』の構成に沿って、支考による『徒然草』の新しい読み方を辿りたい。なお、『つれづれの讃』の本文と図版は、架蔵の版本によるが、適宜、増補国語国文学研究史大成6『枕草子・徒然草』（斎藤清衛・岸上慎二・富倉徳次郎編著、三省堂、昭和五十二年）所収の、富倉徳次郎による解説付きの「翻刻研究文献・『つれづれの讃』」も参照した。以下、「翻刻『つれづれの

「讃」と略称する場合がある。

『つれづれの讃』は、一般的な注釈書のように語釈のスタイルを取らずに、『徒然草』の原文に続けて、支考自身の文章による解説が書かれている。本稿ではそれらを評論的な解釈文とみなして、「評釈」と呼称することにした。

## 一 『つれづれの讃』首巻における「自序」

架蔵の『つれづれの讃』は九卷九冊本で、刊記は「京都寺町押小路上ル町 柏屋勘右衛門 同勘九郎 開版」である。『徒然草』の序段から最終段までの評釈は、巻之一から巻之八までの八冊に書かれている。それ以外に、番号が付されていない巻が一冊あり、二十六丁からなる。そこには自序・標目・凡例・大綱・別録が掲載されている。これが首巻と思われる。<sup>①</sup>

まず最初に、首巻に書かれている内容の前半部を見てゆきたい。なお、以下の本稿では『つれづれの讃』からの引用は架蔵本により、適宜、句読点と濁点を付した。また、平仮名に漢字を宛て、漢字を平仮名にするなどして、読みやすい表記に変えた場合もある。

首巻は「自序」から始まる。「自序」は二丁にわたっており、末尾（二丁裏）に、「元禄戌の年、二月彼岸の日か、このつれづれの讃に筆執りて、この序にこの時の笑ひをとゝむるもの也」とある。【図版1】は、架蔵の『つれづれの讃』首巻「自序」の末尾を掲げたので、参照していただきたい。

すなわち、元禄七年（一六九四）の二月の彼岸の日であったかと思うが、この『つれづれの讃』を書き始めた、というのである。この年の十月十二日に、芭蕉は亡くなり、支考も他の弟子たちと、その臨終に立ち合った。『つれづれの讃』の第八巻末尾に書かれている跋文は、宝永八年（一七一）十月である。その前年の三月に、支考は芭蕉の十七回忌を京都の双林寺で執り行った。したがって、『つれづれの讃』の執筆と刊行には、芭蕉の十七回忌を終えるに至るまでの歳月が籠められている。

翻刻『つれづれの讃』の解説で富倉徳次郎は、自序に書かれている起稿の日付に対して、「跋文が「宝永辛卯十月日」の日付となつているところを見ると、その起稿はたして元禄であるかなり疑わしい」と述べている。起筆の日付と跋文が、二十年近くも離れていることに疑問を呈したのである。けれども、自序の冒頭部分で支考は、「一とせ武江の芭蕉庵にありて、先師とこのつれづれを論ずるに」と書いており、芭蕉との談話の中から『つれづれの讃』が生まれたこ

と、そして、芭蕉の十七回忌も無事終えた翌年に『つれづれの讃』を刊行したという、ひとつながりの歳月を、支考自身は明確に意識していたのではないだろうか。したがって、実際の起筆の時期は正確には不明だとしても、自序と跋文は、芭蕉にかかわる歳月として、よく照応している。この点に注目したい。

つまり、『つれづれの讃』は、『徒然草』の評釈であるとともに、その背景に芭蕉の存在、より正確に言うならば、芭蕉と支考自身の深い繋がりを体现する書物として書かれたと推測したい。そのことは、首巻の最後の部分の「別録」に集成されている、兼好伝関係の記事と同様の文章が、すでに支考の『葛の松原』（元禄五年刊行）の冒頭部でも言及されていることに表れているようにも思われる。この点については、「別録」の考察の際に後述したい。ちなみに、『葛の松原』という書名は、『去来抄』によれば、「先師の名づけ給ふ」ものだった。

支考が芭蕉と初めて対面し、入門したのは、元禄三年である。その二年後に芭蕉の俳論書の嚆矢となる『葛の松原』を刊行し、さらにその二年後に『つれづれの讃』の執筆を開始したというのは、芭蕉との繋がりが、着実に支考に反映して、実を結んだことになる。

支考と芭蕉の繋がりで言えば、『続猿蓑』に支考の「今宵賦」が入っているのは、『猿蓑』に芭蕉の「幻住庵記」が入っていることと照応するのではないだろうか。『続猿蓑』は編者不明とされるが、一説では服部占圃が企画撰定したものを芭蕉が元禄七年の夏から冬にかけて、伊賀で支考と協議し修補したという。

「自序」には、世間に流布している『徒然草』の注釈書は十五種あるが、そのどれもが『徒然草』の本質を掴んでいないと支考が批判すると、芭蕉がなだめたこと、そして支考が自分の考えは他人に理解されずに笑われてもかまわない、千年後に理解されるだろうと言うと、芭蕉が笑って、千年後どころか、明日の批判者をこそ恐れるべきであると言ったことなどが書かれている。芭蕉と自分との和氣藹々たる遠慮のない対話は、「笑い」という点で、『徒然草』最終段の、兼好と父親との対話が、なごやかな「笑い」で締め括られていることや、『枕草子』に描かれている、中宮定子と清少納言の笑いに満ちた親密さも彷彿させる。

なお、この「自序」の中に書かれている、「ほむる人そしる人、すべて世にとどまらずして」とあるのは、『徒然草』第三十八段の「誉むる人、譏る人、共に世に留まらず」を反映させており、支考が、『徒然草』をよく読み込んで、自家薬籠中のものとしていることがわかる。

## 二 『つれづれの讃』首巻の「標目」と「凡例」に見る支考の画期性

「自序」の次には「標目」が書かれている（三丁表～五丁裏）。「標目」は目次を兼ねる。『徒然草』全段を第一巻から第八巻までに収め、通行の章段区分を支考が新たに区切り直し、まとまりごとに内容を凝縮した漢字四文字の題名を付けている。このことが、『つれづれの讃』の新しい工夫であり、『徒然草』の読み方として、それまでにない画期的なことであった。この「標目」を一覧すると、支考が『徒然草』の構造をどのように理解しているか、おおよそのことがわかる。【図版2】には「標目」の第一巻と第二巻を掲げたので参照していただきたい。

次の「凡例」は、いわば、『徒然草』に対する支考独自の「分析批評用語」の一覧・解説である。十三種の用語を掲げて、それぞれの内容を解説している。第一巻から第八巻で展開する『徒然草』批評を理解するための、キーワード集である。ここでは、便宜上、通し番号を付けて、各用語の主旨を要約してみた。

- ① 起語……序段の「物ぐるほしけれ」に注目して、「狂」を文章の楔、結節点とする。
- ② 結語……最終段の「笑」は、「言語の至極」を笑い、「言語不到」を笑ったとする。
- ③ 趣意……「趣」はおもむき、「意」は作者の本意。『徒然草』はその両方からなる。
- ④ 諷詞……作者が思うことを、間接的に述べる態度。
- ⑤ 褒貶……章段末尾に注意して、作者の褒め譏りを判断せよ。
- ⑥ 賊意……「賊意」は禅語。概ね老荘の考えであり、譏って褒めることもあると心得よ。
- ⑦ 模様……『徒然草』における文体・内容の千変万化を意識して、読むこと。
- ⑧ あやかし……儒仏老荘に似せた文章上の方便。聖賢は人を迷わすので、自分で悟れ。
- ⑨ ちらし……筆のすさみとして、前後の内容の間を、和らげたもの。
- ⑩ 通場……故人の言葉を借りて、みずからの言い訳を書くこと。
- ⑪ 断続……続くところと断絶するところの見極めが、大切である。

- ⑫ 虚実……虚実とは文章の両翼であるので、虚は実に、虚は実に取りなすことを見極めよ。
- ⑬ 変化……以上のこともすべて、『徒然草』の文章の変化と言える。

①「起語」と、②「結語」は、『徒然草』の冒頭と末尾に「狂」「笑」の二字があることに着目して、『徒然草』全体の輪郭を明確にしている。十三種の用語の中で、とりわけ諷詞・褒貶・模様・断続・虚実に力点を置いているが、これらの十三種類の用語は、大きく見れば文体に関わるものである。

支考は『徒然草』の書法、すなわち文章の書き方に着目しているわけで、このことから『徒然草』の作品としての主眼を、文体に置いていることがわかる。

## 三 『つれづれの讃』首巻の「大綱」から見た支考の批評態度

「凡例」に続いて「大綱」がある。これは、『つれづれの讃』の批評態度を最初に明確化しておく意図で書かれたと考えられる。「大綱」は五項目からなる。すべて「或曰」で始まり、通説を挙げて、それを批判・否定するスタイルで書かれている。

第一項は、「或曰、つれづれ草は清少納言が枕草紙に似たり」という書き出しである。『徒然草』と『枕草子』の類似性は、最初の『徒然草』注釈書である『徒然草壽命院抄』の冒頭部分や、さらに遡れば室町時代の歌人正徹の歌論書『正徹物語』においても指摘されており、いわば周知のことである。けれども、このような見方は、『徒然草』を「きれぎれなる物と見なして、つれづれを知らぬかたの評なるべし」と述べて否定する。つまり、『徒然草』の書き方は、『枕草子』のような「切れ切れ」の書法ではなく、連続性があると言っているのである。支考は『徒然草』の「つれづれ」を、連続性としての「連れ連れ」として捉えている。「つれづれ」は長雨が切れ目なく続くことなど、から来ているので、その意味では、むしろ、言葉の原点に立ち返っているとも言えよう。

第二項では、「或曰、兼好はつねに老を好める人なり」と書き出して、「是は兼好を知らぬかたの評なるべし」と否定する。支考によれば、莊子や老子が自分の道を一筋に立てているのに対して、兼好は「矯世憤俗の意地」はあっても、それを文筆の間に紛らわしているのであるから、老とは異なるとしている。林羅山が著した『徒然草』の注釈書『野槌』に、兼好は「老の道をもうかがふと見えたり」とあり、また兼好は「世俗をいきどほり」ともある。このような兼好



観をかすめつつも、兼好がそれらのことをまぎらわして書いているという点を強調している。支考は、羅山が『徒然草』から摘出した世俗を憤るような「矯世憤俗の意地」を、『徒然草』の文章の中では紛らわせて書く書法にこそ、兼好ならではのスタイルがあるとしたのである。

第三項は、「或曰、つれづれ草の趣は世の教へなり、人の戒めなり」という説を組上に載せて、「是は虚実を知らぬかたの評なるべし」と批判する。支考によれば兼好は好悪を定めずに、世の中のあり方や人々の態度をあるがままに、書き留めており、「乗筏の一歎息」であると書いている。この譬えは、『論語』公治長篇の「道行かず、筏に乗りて海に行かん」に拠っているであろう。つまり、支考は、世の中があるべき状態を取っていない以上は、それを是正するような積極的・建設的な態度を取らずに、世俗から離れて超然とした生き方を兼好がしている」と理解しており、したがって、兼好が世間の人々を教誡するために『徒然草』を書いたわけではないと主張しているのである。

第四項では、「或曰、つれづれ草は歌書の読み癖あり」という説を否定して、『徒然草』は、歌学書ではないと言う。支考は、この『つれづれの讃』は俗語を多く使っており、『徒然草』を和歌の詠作のために読むような、身分の高い人々向けの解説書ではないとも述べている。歌学のためではなく、『徒然草』に書かれた通りに読んで理解すればよいのだというのが、支考の考えである。

第五項は、「或曰、兼好に艶書の沙汰ありて、古今の注者も明ら成らず」と述べて、このことにこだわることを否定している。「艶書の沙汰」とは、『太平記』巻二十一に、兼好が高師直に頼まれて、塩谷判官の妻に恋文を書いたが見向きもされず、高師直から叱責された話を指す。この話をどのように捉えるかという点で諸説あるが、正解はないと言っているのである。「一生過錯」とか、「物我相忘」という説があるが、これらは儒教や仏教の観点から力み過ぎの解釈であると、支考は述べている。ちなみに、前者は朱子学者の林読耕斎が著した『本朝逸史』（一六四四年刊）における兼好評であり、後者は元政上人の『扶桑隱逸伝』（一六四四年刊）に書かれている兼好評である。兼好は人々からの評価の是非にかかわらず、自在な心で生きたというのが、支考の兼好観である。

以上、『つれづれの讃』の「大綱」五項目を要約してみた。これらを通して、支考は従来の『徒然草』諸注に対して、大いに批判的であり、自分自身の『徒然草』解釈を述べるために『つれづれの讃』を執筆したことがよくわかる。『徒然草』は個別の章段が集まっただけの作品ではなく、そこに統一的に繋がりがあふるのだから連続して読むべきであるが、ある一つの価値観や考え方によって一貫し

ているのではなく、時によって「好悪」が変化する。兼好が『徒然草』を執筆したのは、世間の人々に教訓を示すためではなかった。『徒然草』を和歌の詠作のために読む人たちがいるようだが、この『つれづれの讃』はそのための注釈書ではなく、『徒然草』に書かれていることをありのままに読むためのものであり、『徒然草』を誉めたりけなしたりして心にとどめるのは、『徒然草』を本当に読んだことにはならない。このような支考の考えが「大綱」に明記されている。

なお、『徒然草』を歌書として読む読み方があったことは、『去来抄』に、「かの徒然草は、あつめ書の部に成りて、歌書の内に入らずとかや。思ふべし」とあることが参考になる。<sup>3</sup>つまり、『徒然草』は歌人が読むべき書物と言ってもよいのだが、雑多なことが書かれているので、歌書の部類ではなく、雑書とされているように残念である、というニュアンスであろう。このような考え方に対して支考は、そもそも『徒然草』は歌書ではないと述べているのである。支考の独自性が窺われる。

以上のように、「大綱」には、『徒然草』に対する支考の新しい読み方が、明示されている。そして、それらがすべて、通説の否定から出発している点に、支考の奇抜な発想がある。けれども、否定するだけでは、新しい読み方とは言えない。支考の場合は、まず第一項で、今までにない、連続的な読み方を提示したことに、新しさがある。首巻以後、巻之一から巻之八まで、『徒然草』の全章段を再検討して区切り直すという、大規模な方向転換が図られる。ただし、支考は兼好伝資料の集成も行なっているので、そのことを考えてみたい。

#### 四 『つれづれの讃』首巻の「別録」に掲載された兼好伝資料

首巻全二十六丁の最後に置かれている「別録」はその後半を占め、「兼好伝資料集成」ともいうべき、充実した資料集である。ここで挙げられている資料は、『園太暦』『吉野拾遺』『和歌難波津』『正徹物語』『落書露頭』『草庵集』『崑玉集』『寂寛草附考』、および伊賀国の「兼好の石碑図」である。これほどまでにまとまった兼好伝資料の一覧は、支考の『徒然の讃』の特徴と言ってよい。

このような資料集成という点で、一脈通じるように思われるのは、林羅山による『徒然草』注釈書の『野槌』冒頭部に、序文・卜部系図に続いて、勅撰和歌集に入集した兼好の和歌、および兼好自讃歌と伝兼好歌を集成していることが挙げられよう。

さて、『つれづれの讃』の首巻「別録」に掲載されている『園太暦』の記事は、

六丁余りで分量が多く、これによって、当時の人々は、兼好の生涯をかなり詳しく知ることができた。ただし、ここに挙げられている兼好に関するさまざまな事跡は、すべて『園太暦』の欠落部分の年月日になっており、現代の『徒然草』研究においては、偽書『園太暦』として扱われる。けれども、江戸時代に芭蕉が書写した観応元年二月三日条が現存している。兼好が伊賀で病没したという『園太暦』の記事は、伊賀出身の芭蕉にとって、貴重な記録だったろう。

「別録」の中で、もう一つ注目したいのは、『崑玉集』からの抜粋記事に、次のような箇所があることである。

頓阿法師は風月の情に過ぎたる法師とて、兼好・浄弁などは諫めたりとかや。兼好などの心ざし、まことの法心者と覚ゆ。

これは、頓阿の態度が風流過ぎると言って、兼好と浄弁が批判したという話であるが、仏道者としての兼好の真面目さが強調されている。

ところで、この一文とよく似た文章が、先ほども少し触れた『葛の松原』の二番目に書かれている。芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」の句の成立事情を記す場面に出てくるのである。そこでは「頓阿法師は風月の情に過ぎたりとて、兼好・浄弁の諫め給へるとかや。誠に殊勝の友なり」という文章になっている。ここでは、歌人としてのあり方は是非を問題にしており、仏道者としての側面を問題とすると言うよりは、和歌の詠作態度のあり方について述べる文脈になっている。『葛の松原』は、『日本俳書大系』第四卷（大正十五年）による。

『葛の松原』は、芭蕉の生前に刊行された唯一の蕉門俳論であり、支考がまとめたものである。刊行は元禄五年（一六九二）。これは、『つれづれの讃』（一六九四年自序、一七一一年刊行）と比べても早い時期であるが、『葛の松原』にすでにこの一文が出ていることは、芭蕉とその門人たちの間で、頓阿が風流心を持ちすぎているという評が共有されていたのであろう。『葛の松原』では、芭蕉が晩春の頃、「蛙飛び込む水の音」という句が思い浮かんで、其角が「山吹や」と付けたが、芭蕉は「古池や」と付けて、これで句が決まったという話である。

『葛の松原』ではあくまでも、「古池や」の名句誕生秘話であるが、そこに頓阿・兼好・浄弁の三人の歌人が登場するエピソードが交えられているのが注目点である。支考は、後に『つれづれの讃』をまとめる際に、この時のことを思い出して、兼好伝の一資料として掲載したのではないだろうか。『徒然草』と俳諧の親和性が窺われる。そのように考えるならば、支考が『つれづれの讃』を執筆刊

行したこと自体も、芭蕉と繋がる歳月の現前を求めたと同時に、俳諧を学ぶ人々に、多彩な文学のあり方を示す副読本としての役割を持たせたのではないかと考えたい。

さて、「別録」の最後にあたる二十六丁表には「石碑の図」が掲げられ、二十六丁裏には石碑の説明が書かれている。架蔵本の当該箇所を【図版3】に載せたので、参照していただきたい。

この石碑の図とはほぼ同じ図が、『つれづれの讃』よりも早い時期に刊行された、閑寿の『兼好諸国物語』（一七〇六年刊）に見えるが、そこでは、『つれづれの讃』の図の後に書かれているような、「気牟古牟塚」、すなわち、「けむこむ塚」「けんこう塚」「兼好塚」という呼称を含む説明文は書かれていない。なお、翻刻『つれづれの讃』では石碑の図とともに、「けむこむ塚」の説明文も翻刻されているが、「気牟古牟塚」が、「気年古牟塚」となっている。この部分「年」ではなく「牟」とすべきであろう。また、「月日は猶」ではなく、「月日今猶」であるなど、翻字の誤りがある。以下にこの説明文の翻刻とその読み下し文を掲げるので、【図版3】の左側と併せて参照していただきたい。なお、以下の部分には句読点を付して、読みやすくした。

右之碑石者、在伊賀国国見山之麓、田奈保村。俗称「気牟古牟塚」也。年号月日、今猶明也。但古田井庄、今、呼称「田奈保」者乎。

（右の碑石は、伊賀国国見山の麓、田奈保村に在り。俗には気牟古牟塚と称す也。年号月日、今猶明らか也。但し古への田井庄、今は田奈保と称するか。）

支考が伊賀田奈保（「田奈保」は、種生・たなお・たねお、などととも書かれる）にあつたという「兼好の墓」あるいは「兼好の塚」を実際に訪れているかどうかは不明であるが、芭蕉と同じく伊賀出身で、芭蕉の弟子である服部土芳の『養虫庵集』を読むと、元禄十一年（二六九八）の八月十五夜に、兼好塚を訪れている。芭蕉も、伊賀国の名所などを知らせる弟子への書簡の中で、「塚」の筆頭に「兼好塚」を挙げている。

以上、『つれづれの讃』九卷九冊の中で、唯一、巻の番号が付いていない首巻の全体を概観してきた。「自序」では、この書物の執筆のそもそものきっかけが、江戸の芭蕉庵での先師芭蕉との『徒然草』問答から生まれたことを述べて、『徒然草』の新しい読み方を自負し、その背後には芭蕉の暗黙の公認があることを含

ませている。

ここで、支考と芭蕉の交流を、主に堀切実『支考年譜考証』（早大俳諧研究会年報第一集、笠間書院、一九六九年）などを参照しながら、略記してみよう。支考は、元禄三年に芭蕉の弟子となり、元禄五年には、芭蕉の足跡を辿った『葛の松原』を刊行した。この中で、先にも触れたように、芭蕉の「古池や」の句の生成過程を紹介し、頓阿に対する兼好・浄弁の批評を書き留めている。元禄七年九月には、芭蕉と伊賀で合流し、大坂への旅に同行する。同年十月、逗留中の大坂で芭蕉の病状が悪化し、十月十日に、支考は芭蕉の遺書を代筆する。十二日に芭蕉が死去すると、支考ら門人たちが滋賀大津の義仲寺に、芭蕉を埋葬した。芭蕉没後の支考は、三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回忌、そして享保十年（一七二五）には芭蕉の三十三回忌を成し遂げている。その六年後、享保十六年（一七三一）二月七日、支考は故郷岐阜で六十七歳の生涯を閉じた。支考は、芭蕉の没後、各地への俳諧行脚によって、蕉風俳諧を広め、数多くの俳論書を刊行し、俳文撰集も刊行した。支考がいかに芭蕉の人と文学に傾倒し、その伝播に努めたかがわかる。

そのような支考の人生において、『つれづれの讃』の執筆と刊行が、どのような意味と意義を持つにいたったのか。次節では、『つれづれの讃』の第一巻を中心に、支考の批評精神あふれる『徒然草』論を概観してみたい。

## 五 『つれづれの讃』に見る支考の批評的読解

支考は、『つれづれの讃』の第一巻から第八巻までにわたり、『徒然草』の全段を順に取り上げている。第一巻は、序段から第十八段までを収める。序段は、これだけを独立させて、「起語」と命名し、以下、現行の第一段から第十八段までを、内容のまとまりごとに十一の区分に分けて、それぞれに漢字四字による題を付けている。

以下、第二巻は、現行の第十九段から第五十七段までを、「四季観相」「古今一卷」「文対前実」「生死到来」「文対後虚」「老病迅速」「不断不統」の七区分とする。第三巻は、現行の第五十八段から第九十段までを、四区分とする。第四巻は、現行の第九十一段から第三百三十六段までを七区分とする。第五巻は、現行の第三百七十七段から第八十二段までを八区分し、第六巻は、現行の第八十三段から第二百十四段までを五区分、第七巻は、現行の第二百十五段から第二百三十七段までを、やはり五区分とする。第八巻は、現行の第二百三十八段から第二百

四十二段までを二区分とし、最終段である第二百四十三段を、「結語」として独立させた。

翻刻『つれづれの讃』の解説で、富倉徳次郎は、「私は彼の徒然草注解は、多分にその形態や、文章上の技法についての関心が大きく、その点ではすぐれた見解を見せていると思うが、一面その内容理解、ことに兼好の持つ思想的なものについての理解は、さまで深いものではないと思うのである」と述べつつ、その一方で、「しかしまたそれに反して、兼好の人がらについての理解はなかなか深いものがある。すなわち『風流の隠者』としての兼好をよく理解し、したがってこの書を単なる教誡の書と見る見方からは全く解放されているのである」とも述べている。

けれども、支考が最も工夫し、独自性を発揮しているのは、「章段間の連続性の発見」である。支考が実行した、数段から長くは十数段にも及ぶ、章段の再統合をどう捉えるかという検討こそが必要であろう。『徒然草』の序段と最終段を除く中間部は、合計二百四十二段である。それを支考は四十八区分に統合した。支考がどこまでを連続章段と認識し、どこからを異なる連続性の出発点と見ているか、この点が『つれづれの讃』の要である。以下の考察では、支考による章段の再区分が適切であるか、また、ひとまとまりごとの漢字四字の題名が、内容に即しているか、という二点を中心に検討してゆきたい。

『つれづれの讃』の書き方は、他の一般的な注釈書と異なり、語釈や人名・地名などの解説は付けずに、支考の考えや感想を述べるスタイルで一貫している。したがって、本稿では、支考の文章を「注釈」と呼ばずに、「評釈」と呼称してきた。支考は、個々の章段に対する評釈で、「注曰」「讃曰」「弁曰」などの言葉を立てて、評釈を進めている。『つれづれの讃』の第一巻から第八巻は、この四十八区分のそれぞれを一段と数えて番号を振っている。たとえば第一巻の「起語」に続く最初の区分を「第一段」、以下、統合的な区分を順に、第二段、第三段、第四段と命名している。けれども、これは現行の章段番号と紛れやすく、ややわかりにくい。したがって、本稿では、新区分による章段番号は、『』に入れて、たとえば『第一段』、『第二段』と記述することにした。

「起語」（序段）は、「注曰 此段は序分也」と始まる。それに続けて、『徒然草』の諸注はすべて「文字の論にして、つれづれの趣意にはあらざるべし」と書いて、それまでの注釈書が、「文字の論」、すなわち「語釈」に力点を置いていたのを批判している。そして、作者である兼好は、何の当てもなく書いていったというのであるが、それは俗に言う「卑下自慢」（翻刻『つれづれの讃』で「昇下



「自慢」となっているのは誤植)であって、「殊の外、一段一段に次第ある事也。断続虚実の文法は、殊につれづれの趣なる事を知るべし」と主張する。次いで「讀に曰」で、支考は、言語と文章の關係性を、「言語は本より実態なければ」「先は文章の変化也」と規定する。支考は、自分自身の『徒然草』読解の基盤は、「文章の変化」を読み取ることでありと述べている。ここが眼目である。

次に「《第二段》 諷詞有虚一章」は、『徒然草』の第一段を、「諷詞有虚」と命名している。ここで「一章」とあるのは、「諷詞有虚」の段は、一つだけであるという意味である。「注曰」は、現行の第一段を四節に細分して、順に評釈する。第一節は「いでや此世に生まれては」から「いと口をし」までで、ここでは「此世」の二字が次の「法師」につながることに注意を喚起し、次節で法師を出す「抑揚のさかひ」に注目する。

ただし、「ひたぶるの世捨て人」から「気圧さるこそ、本意なきわざなれ」までを三節として、容姿や才学の理想をすべて法師のこととして解釈する区切り方は不適切で、この部分は、宮廷人のあらまほしきことである。第四節は「ありたきことは」から「おのこはよけれ」まで、「声をかしく拍子とり」という「遊芸のはづみ」から「下戸ならぬこそ」と酒のことまで書いていることを捉えて、「この文章の変化にはさらさら油断すべきにあらず」と評している。

その後の「讀曰」で、「兼好は本より風流の発心者」であり、「作者の心の置き所は、ただこの風流と模様也」と述べて、第一段で、帝の位から「酒ぶり」酒席での振る舞い」まで、変化を付けている書き方を、「わが家には是を文章のちらしといふ」と述べて、先に見てきた「凡例」の⑨「ちらし」を、具体的に第一段の解説で使っている。「わが家」というのは、支考が自分の学説を指して、このように呼んだのであり、『つれづれの讃』の中に、何度も出てくる言葉である。

次の「《第二段》 諷詞有実一章」も、「一章」なので、『徒然草』第二段だけに對する評釈である。前段、すなわち第一段は「虚」であり、此の段は「実」であり、前後の段で抑揚があると書いている。支考は『徒然草』の各章段に即して、自らの批評用語を鑢めつつ、論を展開してゆく。第一段がなぜ「虚」で、第二段が「実」であるかは、具体的に書かれていないが、この後の評釈の中でも、「虚実」に触れることによって、論の精密化を図っていると思われる。

ここからは巻之一における章段の連続・断絶を略述して、支考の『徒然草』理解をたどってゆこう。「《第三段》 楽而不淫一章」も「一章」とあるので、第三段だけの評釈である。この段を「さり」とて」を境目として二節に分ける説を批判し、「さり」とて」以下の部分は、それ以前の「前文の注釈也」、「さり」とての詞に

一転して、丁寧に前を注したる也」と評釈する。さらに加えて、『源氏物語』で薫の大将はまことの色好み、匂宮は好き人ということを、兼好が思い合わせて書いているのであらうと推測している。

このような具体的な推測は、林羅山の『野槌』にも、北村季吟の『徒然草文段抄』にも書かれておらず、支考の読み方の独自性を感じさせる。第三段末尾の「讀曰」で、「第一は虚にして、帝の御位をほめなし、第二は実にして聖代の淳朴をしめす」と総括したうえで、この段は「おもひもよらぬ好色の二字に人の心を動かす」点で、「人間第一の迷」を説き出す「工夫」に感じ入っている。このように、支考による『徒然草』の文章批評が行われている。

『《第四段》 後世不忘一章』は、第四段の評釈である。「後世不忘」という題名は、第四段の書き出しの原文をそのまま使って、的確明瞭である。ここでも、第一段以来の書き方に触れながら、「帝より公家殿上のありさま、今はやる好色のよしあしなど、ちらとこの段に法語を説き出したる」ことを誉め、この段が「殊に短語の文法」であることに注意を喚起している。第四段は、「後の世の事、心に忘れず、仏の道、疎からぬ、心憎し」という、短い一文だけの段である。

文章表現の短さに注目した支考は、同時に、俳諧の五・七・五という極めて短い定型をもそこに重ね合わせているのではないだろうか。文章の書き方としての「文章法」をつねに念頭に置きながら『徒然草』を読み進めてゆく支考は、後に、「仮名詩」というジャンルを創作している。これは「漢詩」に対応する押韻スタイルで表現するものであるが、散文に対する韻文ジャンルの拡大を視野に収めて実践した支考の文学精神の根底には、『徒然草』の中にさまざまな文体の可能性を読み取ったことが大きく作用しているのではないか。『つれづれの讃』はそのことを教えてくれる。ちなみに、押韻スタイルの詩ということでは、昭和の時代の戦後に、中村真一郎・加藤周一・福永武彦たちによる「マチネ・ポエティク」があった。

以上見てきた冒頭部に対する評釈は、江戸時代以来、現代も通行している章段区分そのままに沿ったものであり、この後の『《第五段》 自己発心一章』、『《第六段》 妻子為累一章』、『《第七段》 生者必滅一章』までは現行の章段区分と対応している。それが、『《第八段》 色欲自警一章』になると、第八段と第九段をまとめて一段としているにもかかわらず「一章」となっているのが不審であるが、林羅山の『野槌』も現行の第八段と第九段をまとめて一段としている。

ところで、この段の標題に「自警」という言葉が使われていることに注目したい。なぜならば、「自警」という言葉は、『野槌』の注釈、およびそれを踏襲して

紹介している『文段抄』にも挙げられている、朱子の漢詩を踏まえていると考えられるからである。『つれづれの讃』には、このように『野槌』と『文段抄』を参照している箇所が、これ以後も多く見られる。支考が最も参照しているのが、『野槌』と『文段抄』の二書であることを示しているのだろう。そのように推測するならば、支考の『つれづれの讃』は、一見すると、自分の考えを心の赴くままに自由に執筆しているように思われるが、『徒然草』經由で、儒学者の羅山と和学者の季吟という江戸時代前期を代表する二大知識人の教養を巧みに摂取しながら、自己形成を成し遂げた側面が垣間見られる。

『第九段』相士以居一章』は、『徒然草』第十段の前半部、すなわち「家居にこそ、事様は推し量るるれ」までを評釈し、その後の『第十段』朋友不信五章』は、第十段の後徳大寺家の屋根に縄を張って鳶を止まらせまいとした話から始まって、現行の第十四段「和歌こそ、猶、をかしき」までをひとまとまりにして、『第十段』としている。このことは、それまでの章段区分が現行の章段区分とほぼ同じだったのと異なり、章段間の連続性によって、大きくまとめて一段としている点で、新展開が示されている。これ以後『つれづれの讃』の評釈番号は、この評釈書独自の章段番号となるので、注意を要する。

ただし、連続章段が数多くなると、それらを総称する題も付けにくくなる。ここでも「朋友不信」は、第十二段の題にはなるが、他の章段をも「朋友不信」という題名で包摂することは無理を伴うように思われる。

『第十一段』自適逍遙四章』は、『徒然草』の第十五段から第十八段まで、旅・神楽・山寺参籠・許由孫晨の四章段をまとめて、「自適逍遙」と名付けており、標題の付け方としてはふさわしい。神楽の段で、『枕草子』との類似性に言及しているのは、先行注釈書では『徒然草句解』がある。『徒然草句解』についてはかつて、その注釈態度を論じたことがある。その論文で私は、『徒然草句解』は、自由に自分の考えや気づいたことを書いていると述べたが、『つれづれの讃』でも、ここで『枕草子』に触れていることから、両書には類似性や響き合いを感じた。

このような読み方を、私は「響映読み」と名付けている。『つれづれの讃』は、他のさまざまな注釈書との響映に気づかされる自由な書き方によって、特徴付けられるのではないかと思う。なお、文体の面では、神楽の段を「短語の文法」、山寺参籠の段を「短語」と述べて、両段がごく短い段であることに触れている。

次に巻之二の冒頭『第十二段』四季観相二章』に触れておきたい。「二章」とあるのは、第十九段と第二十段の、二つの章段をまとめて一段としたということ

とである。第十九段（折節の移り変はるこそ）と第二十段（何某とかや言ひし世捨て人）の二段が、どちらの段も四季折々の情景を描いているところからの命名であり、ふさわしい。これらの二段における兼好の筆法については、「をのが言語をにゆづりて、自己を止めざるは、文章の法ともいふべし」と述べて、ここでも文体への関心がある。

なお、ここで「観相」という言葉が付いていることに注目したい。「観相」は、「凡例」の十三種の中に入っていない用語である。けれども、支考の『付方八体』には「観相」が出ており、連句の付け方の方法論の一つである。これについては、堀切実『蕉風俳論の研究』（明治書院、一九八二年）の第二章「支考俳論の諸相」のV「付方八体説の成立」を読んでいるが、そこでは『つれづれの讃』とのかかわりは書かれていなかったため、今後の研究課題の一つとした。

課題と言えば、今回は、『つれづれの讃』における章段の連続性を、支考がどのように判断して、「断続」を方法論化したのかという点も、まだ未開拓の領域であった。支考は、連続性のある一団の章段の中にも、繋がりのない段を含ませて、大きなまとまりを作ってゆく。その際の理論的な説明として、それ自体を「筆のすさび」として容認しているのである。自在な「断続観」と言えようが、「筆のすさび」という概念自体は、北村季吟の『枕草子春曙抄』で、よく使われる文学用語である。支考は、それをさらに敷衍して、前後の段との関係性の間に「まぎらわし」を入れるのが『枕草子』の文法であると書いている。支考は、自己の文学観に『枕草子』への文学批評も招来する自在さを持っていると言える。

## おわりに

最後に、支考の『つれづれの讃』が書かれた意義について、今回考察した範囲でまとめておきたい。今回『つれづれの讃』から取り上げることができたのは、首巻および巻一と、巻二の始めの部分だけであったが、首巻からは、それまでの『徒然草』評者たちとは異なる批評の方法論が明確に示されていることに、改めて深い意義を見出すことができたように思う。

とりわけ、「凡例」における支考の「分析批評用語」の豊富さは、それらの多くが文章法にかかわるものであり、いかに支考が『徒然草』の文章表現の分析に力点を置いているかが示されていた。そのことと表裏一体になっているのが、



「大綱」に書かれていた五項目であった。それまでの『徒然草』注釈書群は、注釈者自身の学問・思想を根柢に置いて、章段ごとに詳細な注釈研究を行うスタイルだった。そのような既定の方法論を打ち破り、連続と断絶、そして変化という文学作品生成のダイナミズム解明への階段が示されていた。

この方法論は、文学作品の注釈が、何らかの価値基準によって解説研究が可能となるという既定路線をから離れて、新たな作品分析が果たして可能かという、それまでになかった視点が提示されたということを意味する。そのことを実行できた点で、支考の『つれづれの讃』は画期的な『徒然草』論となった。

支考が生きた時代は、『徒然草』の注釈研究史で言うならば、すでに完成時期以後であり、膨大な注釈書を集大成した『徒然草諸抄大成』が刊行されてからも二十年が過ぎていた。そのような『徒然草』研究の飽和期に、支考は章段区分も統一されていた『徒然草』の全体を改めて区切り直して、四十九段にまとめ、しかもそれぞれに標題を漢字四字の標題を付けて、全体の内容把握を一望の下に示した。

さらに支考の場合、『つれづれの讃』の執筆刊行と連動するかのようになり、さまざまな蕉風俳論書を執筆し、支考は西国にも北越にも俳諧行脚を行い、蕉門俳句の全国への拡張をも実現している。そのような俳諧行脚の際に、『つれづれの讃』を各地の弟子たちに頒布し、『徒然草』の講義も行ったのではないだろうかと思わせる書簡が残っている。

堀切実『支考年譜考証』の五十四頁に紹介掲載されている、宝永八年の支考書簡である。この年は、まさに『つれづれの讃』を刊行した年である。この手紙の中に「つれづれ（二字分空白）北国筋にて八十部弘申候」とか、「唯今百部摺かかり候所」などある。「つれづれ」の後が欠字になっているし、このあたりの手紙の記述内容について『支考年譜考証』に説明はなく、正確なことは不明だが、『つれづれの讃』のことのように思われてならない。

『つれづれの讃』の刊行から七年後、支考編の俳文集『本朝文鑑』の序文で、文章を書くための「五ヶ条の法」を掲げている。「まずは第一に文章の虚実を知るべし」、「第二には文章の起結を知るべし」とある。「虚実」も「起結」も『つれづれの讃』ですでに書いていたことである。

この他にも「第三には二句の長短を知るべし」とか、第四には倭文は「手爾遠波」が大切であること、第五には、歌人や連歌の跡を追わずに、「俳諧の筆格」を立てよ、と述べている。支考は『徒然草』の全段にわたって、語釈による従来型の注釈書ではなく、散文で文章を書き綴ることの意義を追究した。その結果が

『つれづれの讃』という、新しい文学批評を生み出した。そのことは、『徒然草』研究に画期をもたらしただけでなく、ある特定の価値観や理論の桎梏から離れて、自由に文学研究を行う広い地平を示し、近代へとつながる批評評論ジャンルの離陸期を準備することになったと評価したい。

今回取り上げられなかった巻之二の残りと、それに続く巻之八までについては、「続考」として、次なる機会にぜひ研究してみたい。

## 注

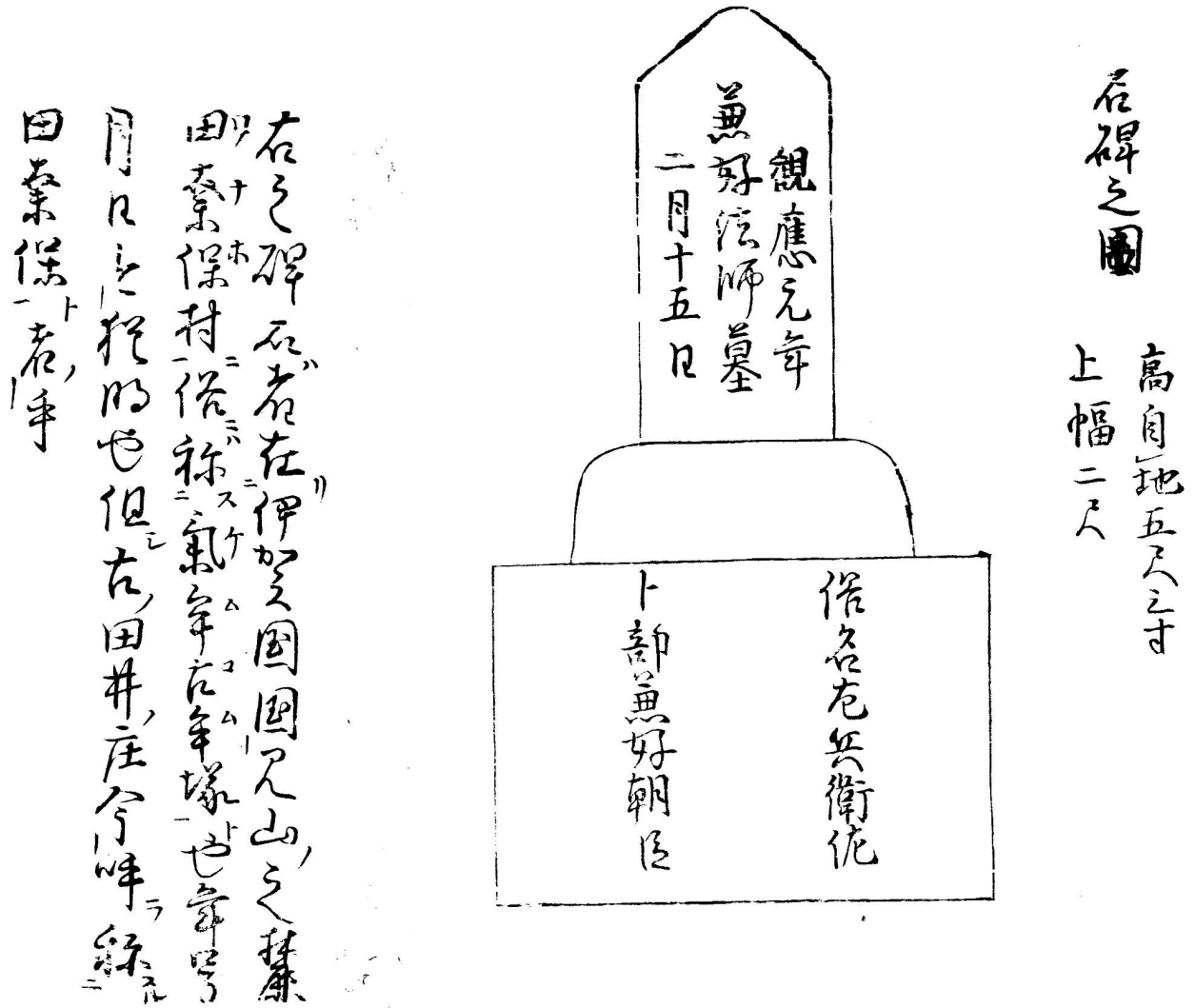
- (1) 『つれづれの讃』は、「翻刻『つれづれの讃』解説によれば、架蔵の九卷九冊本の他にも、九卷五冊本や八卷八冊本がある。なお、八卷八冊本は、首巻を欠くものか。
- (2) 新日本古典文学大系『芭蕉七部集』（白石佛三・上野洋三校注、岩波書店、一九九〇年、四五六頁、上野洋三執筆）
- (3) 引用は、日本古典文学全集『連歌論集・能楽論集・俳論集』（小学館、一九七三年）所収の栗山理一校注・訳「去来抄」によった。
- (4) この記事には、兼好が最晩年に伊賀で病に臥し、典業院和気清元が遣わされたことなどが書かれている。なお、芭蕉によるこの部分の書写、および偽書『園太暦』については、拙著『兼好』（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇〇五年）の第三章の2「近世兼好伝の世界」（二二―二二八頁）で述べた。
- (5) 拙著『徒然草文化圏の生成と展開』（笠間書院、二〇〇九年）の第二部第二章「隠逸伝から兼好伝へ」（一九四―一九六頁）でこのことを論じた。
- (6) 元禄元年四月二十五日付、惣七（猿雖）宛書簡。（萩原恭男校注『芭蕉書簡集』、岩波文庫所収）
- (7) 拙稿『徒然草句解』の注釈態度——巻之一を中心に——（『放送大学研究年報』第三十一号、二〇一三年）

（二〇二二年十月二十九日受理）



老病迅速  
老來りて以下  
右一章

【図版2】 架蔵『つれづれの讃』首巻より



【図版3】 架蔵『つれづれの讃』首巻より（部分）



## A new way of reading *Tsurezuregusa* presented in Kagami Shiko's *Tsurezure-no-san*

Yuko SHIMAUCHI

### ABSTRACT

*Tsurezure-no-san* (つれづれの讃) is a book of criticism upon the whole of *Tsurezuregusa* (徒然草). The author Kagami Shiko (各務支考、1665~1731) wrote its postscript in 1711, this fact suggesting its date of publication. Shiko was a disciple of Matsuo Basho (松尾芭蕉) and is counted as one of Shomon Jittetsu (蕉門十哲、Ten Eminent Disciples of Matsuo Basho). He published posthumous writings of Basho and wrote a number of books about haikai theory (俳論書) from his own viewpoints.

Shiko's *Tsurezure-no-san* has been hitherto treated as a commentary upon *Tsurezuregusa* by students of the history of Japanese literature. However, it is not an ordinary type of commentary which explains names of persons and places, difficult words and historical incidents seen in the text. Shiko divides *Tsurezuregusa* into what he thinks as definite blocks, according to his own standards of criticism.

This monograph intends to verify whether Shiko's critical method works effectively in reading *Tsurezuregusa* or not. Firstly, we will consider the effectiveness of his dividing *Tsurezuregusa* into forty-nine blocks. Secondly, we will verify the significance of his use of thirteen terms such as satire (諷詞), praise and censure (褒貶), break (断絶), truth and falsehood (虚実), change (変化) etc. in his comments on *Tsurezuregusa*.

After that we will discuss the great contribution of his new way of reading *Tsurezuregusa* to the literary activities of Shiko himself; that is, writing of a lot of books about haikai theory (俳論) and compilation of several selections of haikai prose (俳文撰集).

Shiko found a possibility of consummate art of short prose in the style and expressions of *Tsurezuregusa*. That is why he studied it closely and found a way of reading it following the change and development of its author's thought. It could be presumed that Shiko expanded this attitude into a method of dealing haikai (俳諧), which clearly classified the way of development in linking lines of renkus (付け合い). Thus selections of haikai prose such as *Honcho Bunkan* (本朝文鑑、1718) and *Wakan Bunsou* (和漢文操、1727) were compiled by him. We can say *Tsurezuregusa* played a great part in the world of Shiko's literature.